

## 「なるようになっている」

和田 一丸

昨年夏、心臓の冠動脈へのステンド挿入手術を受けました。周囲には内緒でこそっと入院したのですが、それでも聞きつけた方がお見舞いに来てくださり、「御院さん、がんばってくださいよ」と激励してくださいます。それはそれで嬉しいのですが、こんなことも考えてしまいました。「がんばってくださいと言われても、医師に全てを預けた私です。どこでどうがんばればよいのだろう…」と。

私の尊敬する方が、こんな手記を残していらっしゃいます。その方が癌の手術で手術台へ向かう時、お見舞いの方々が口々に「がんばってくれ」とおっしゃった時、「みんなの心遣いはありがたいが、手術の成功・不成功も、自分の命も、全て医師にお預けしている私だ。がんばりようがないのだ。むしろ、全てをお任せしてさわやかな気持ちになっているのだよと皆に告げたかった」と。

私たちは、「がんばれ、がんばれ」と言います。何事も「がんばれば何とかなる」という思いから逃げられないでいるのではないのでしょうか。親鸞聖人はそれを「自力の心」だと厳しくおっしゃり、「自力」とは「わがちからをはげみ、さまさまの善根をたのむこと」と教えてください。この「わがちからをはげむ」とは「がんばる」ということです。

よくよく考えると、私たちは阿弥陀仏の救済のはたらきに包まれているのです。阿弥陀仏のはからいの中に生かされているのですから、がんばる必要はないのです。日常生活で喜んだり悲しんだり、怒ったり叱られたりする私ですが、全て「なるようになっている事実」を生きているのだと言えそうです。